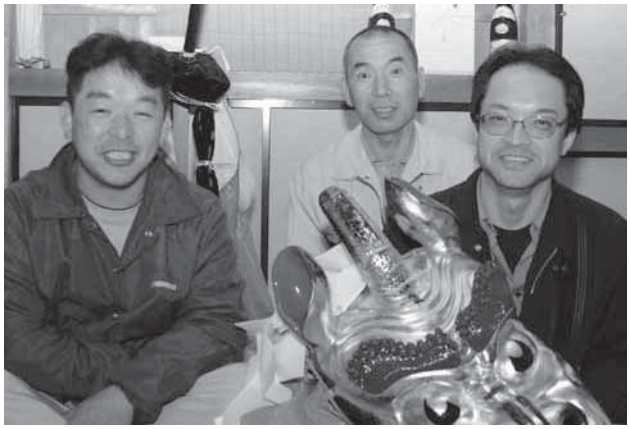
シリーズ

元気です 50

伝統と誇りを引き継ぎ舞い続ける



中 田村　稔さん
Minoru Tamura

左 市村　修さん
Osamu Ichimura

右 田村　秀樹さん
Hideki Tamura

売沼（めぬま）神社 麒麟獅子舞保存会

江戸時代の初めから伝わる因幡の麒麟獅子舞

金色の顔に1本の角、大きな鼻、そしてインパクトのある眉。麒麟は、中国の伝説上の聖獣で、鳥類の長である鳳凰と並んで、獣類の長とされています。麒麟獅子舞は因幡地方に古くから伝わる独特なもので、江戸時代初期の1650年ごろ、初代鳥取藩主・池田光仲によって創出されたと言われ、県の無形民俗文化財に指定されています。光仲は、徳川家康との血のつながりを世に示すため、家康が権威の象徴としていた麒麟の姿を獅子舞に用いたものだと言われています。

以来、約350年間、この因幡地域と兵庫県北部の但馬地域の一部で引き継がれ、現在でも140ほどの地区で、五穀豊穣と家内安全の願いや感謝の思いを込め、舞われています。

時代を超え人から人へと伝えられ

今回ご紹介するのは河原町曳田（ひけた）の「売沼神社麒麟獅子舞保存会」のみなさんです。メンバーは40歳代を中心とした9人で、会の設立は今から8年前の平成9年12月。「それ以前は、集落の青年団としてお祭りで舞っていただけでしたが、鳥取青年会議所が主催するイベントに出演したことがきっかけでした」と会長の田村秀樹さんは当時を振り返ります。

麒麟獅子舞は、獅子の中に前役と後役の2人、それと赤い能面をかぶり獅子を先導する猩々（しょうじょう）、そして楽器の鉦（かね）、太鼓、笛の6人で構成されていますが、舞い方の手本や演奏のための楽譜があるわけではありません。時代を超え、人から人へと教えられ、受け継がれてきたものです。事務局長の市村さんは「先輩方から教わった獅子舞を守っていくことが自分たちの使命」とはっきりと話します。

賑やかなこととお祭りが大好きという、一番年上で副会長の田村稔さんは現在53歳。「麒麟獅子舞は自分にとって青春そのもの。いくつになっても青春です」と少年のような瞳ではにかみながら話します。

また、「舞い終わった後の達成感がなんとも言えなくて」と市村さん。さらに「仲間と飲むお酒は楽しくておいしくてたまらない」と田村稔さんは続けます。